

三好耕三 『マザーロード／ルート 66』

Yamada Akiko
山田 明子

アメリカのイリノイ州シカゴを起点に、西海岸のカリフォルニア州サンタモニカへと続く全長2,400マイル（約3,840km）におよぶ道。アメリカ初の国道であるこのルート66は、1926年に開通した。スタインベックの小説『怒りの葡萄』の中で「マザーロード」と呼ばれたこの道は、アメリカの広大な大地に点在する小さな町や村を經由して、中西部と南西部の主要都市を結ぶ幹線ルートとなり、東から西へ、そして西から東へと半世紀以上にわたり人々の夢を運び、アメリカの物流を支えて来た。'70年代になりインターステート・フリーウェイ（州間高速道路）が全米に張り巡らされると分断されて、'80年代にはついに幹線ルートとしての役割を終えたものの、歴史的記念物として断続的にはあるが復旧され、現在では多くの愛好家がこの伝説の道を訪れている。ガソリンスタンドやカフェ、ダイナー、モーター、食料品店、アメリカを語るときには必ずと言っていいほど登場するこれらの典型的な物が、街道沿いに今でもそのノスタルジックな面影を残している。

三好耕三は、1993年から96年の間に、いくつかの旅に分けてこのルート66をたどり、道路上に三脚を立て大型カメラを構えて、街道沿いの光景を写真に収めた。三好は、撮影とプリントワークという二つの要素が見事なバランスを保ったモノクローム作品を創りあげている、世界的にも希有な写真家であるが、ルート66を捉えたシリーズはアリゾナ州ツーソンに滞在した時に撮影された。すでに写真家として数々の作品を世に生み出していた三好は、文化庁の奨学金を得て、全米でも有数の研究機関であるアリゾナ大学センター・フォー・クリエイティ

ブ・フォトグラフィーに拠点を置き、ひたすら撮影を続けていたのだった。

ルート66に三好が初めて出会ったのは、1970年代に遡る。それは、写真の学生だった三好がある日、大学の講堂でエドワード・ウエストンのインタビューが収められたドキュメント映画を見たことから始まった。野菜や貝殻のクローズアップ、ヌードや風景の作品で知られるウエストンの、写真を軸として営まれるシンプルな生活の中で、ひたすら写真に取り組む姿が三好の心に強く残ったという。卒業後、写真を続ける生活を模索する中でサンフランシスコに滞在した三好は、ウエストンに導かれるように、写真に深く関わる道を選び、歩み始めた。ルート66に出会ったのはこの頃である。写真人生の中でいつの日か、必ずこのルート66を撮ろうと三好は心に決めたのだった。

「私の写真は旅から生まれる」と語る三好は、旅をすることで数十点から成る作品群をこれまでに創り出してきた。たいていの場合1～2週間、長い時は1か月をかけて旅をするという。その姿勢は日本においてもアメリカにおいても変わることがない。撮影のテーマを決めると地図を開き場所をマークしていく。一つの場所は次の場所へと繋がっていく。軽やかに車を走らせ旅をして、何か未知な物や光景を見つけると8×10インチの大型カメラをすばやく組み立てて写真を撮ってきた。三好の感性は、光を浴びてきらきら輝く雪の結晶のように研ぎ澄まされ、そして同時に、鈍い光を放つ金属のように重厚である。心惹かれる光景に出会うと、それに対峙し、撮影することのできる瞬間を長い時



photograph copyright © Kozo Miyoshi

間の中で選び出してきた。

旅をして写真を撮ることを、人生という旅に重ね合わせて、三好はひたすら写真を撮り続けている。光と影が織りなすモノクロームの写真画面には、どこまでもまっすぐに続く道路が描く直線や、雲や木や山並みの曲線が、シンプルで乾いた印象的な空間を作り出し、視覚的に強い効果を生んでおり、それが三好の写真の特徴の一つとなっている。三好が捉える光景は見る人の潜在意識と響き合い、心地よい緊張感と落ち着きをもたらしていると言ってもいいだろう。三好によって写された素朴で飾らぬ人々は誰もが、人は与えられた環境の中で、与えられた人生を一步一步踏みしめて歩いていくものだ、と言っているかのように感じられる。そして三好の写真は、道や町や建物や空や樹木や山や川までもが、確かな存在感を持って人々を見守っていることに気付かせてくれるのである。

赤色と黄色の点滅灯だけの信号機や、古びたカフェ、砂埃をあげて走り去るピックアップトラック、食料品店、ひび割れた路面、長距離バス乗り場へ孫娘を送る初老の婦人、乾燥した空

気につつまれてゆっくりと呼吸しているかのような街並み、湿り気を帯びて広がる空、これらの目の前にあるものすべてがモノクロームの画面の中にちりばめられていて、それぞれが圧倒的な存在感を持ち、光の変化の中で、緩やかな時間の流れを語り、心模様を伝え、そしてバランスよく画面の中に収まっている。これが三好の写真である。そして、何よりも類い稀な美しいプリントが、時間の重なりや、「気配」とも言える対象物や心の内面から湧きおこるものまでを映し出している。言葉で語ることもどかしさを感じてしまうほど、時間と空間の調和に満ちた美しい写真である。

三好耕三（みよし こうぞう）

1947年千葉県に生まれる。1971年日本大学芸術学部写真学科卒業。1991年から96年まで米国アリゾナ州に滞在。日本やアメリカを捉えたシリーズで知られている。現在、東京を拠点に制作活動が続いている。

作品は、東京国立近代美術館、東京都写真美術館、ジョージ・イーストマン・ハウス国際写真美術館、アリゾナ大学センター・フォー・クリエイティブ・フォトグラフィー、プリンストン大学美術館などでコレクションされている。

『Kozo Miyoshi: In the Road』

1999年 Nazraeli Press 社 ハードカバー